サイレント・ストーリー

宇喜多広生

サイレント・ストーリー

深夜のバーの客ともなれば、稀にとても風変わりなヤツと並ぶこともある。
その男はとても無口だった。

彼は学生時代に、ある女の子と付き合っていた。
とてもとても無口な彼に一体どのようにして彼女が出来たのか？

彼は静かに語る――。

朝、教室にやってきて挨拶を投げかけたクラスメイトに小さく「おはよ」と返せば、そのまま一日言葉を発せずに終業のチャイムを聞くことなど、ざらである。
誰も彼に挨拶をしなければ、クラスの誰もが彼の声を聞くことなく一日が終わるのだ。
といっても、全く話をしないかといえばそうではない。趣味の合う友人も居れば、クラスメイトと普通にコミュニケーションを取れる。
そんな彼がなぜ誰とも話をしない日があるかと言えば、理由は簡単。
休み時間は彼は大抵寝ていることが多いからなのである。
たまに寝ていないかと思えば、仏頂面で厚め小難しそうなの文庫本を開いていたのだ。
一方、彼女もとっても無口だった。
にこやかな笑顔が印象的で、休み時間などは常にクラスメイトたちとの談笑の輪の中に居る姿を見かけた。
だが、彼女は聞く一方で、自ら話を切り出すことはほとんど無い。にこやかに無口。それが彼女のイメージだった。
そんな彼女と彼がどうやってファーストコンタクトをとったのか？
ある時、授業中のことである。先生のちょっとした不意のギャグが、みんなのツボにすっぽりとはまったのか、クラス中が大爆笑の渦に包まれた。
先生はちょっとしたシャレのつもりで、まさかの大ウケに苦笑いを浮かべていた。その狙ってなかったのに感がさらに笑いを呼んだ。
そんな笑いの渦の中、である。
不意に。
目が合った。
彼女と、彼の。
視線と視線が触れ合ったほんの一瞬に、彼女の声が聞こえた。
（おもしろいね）
幻聴のような違和感はない。
それが彼女の声だという確証はない。
だって、彼は彼女の声をまともに聞いたことがないのだから。

（ああ、おもしろいな）
　そう返す。視線で。

　彼女はその返答に満足して前に向き直り、ようやく引き始めた笑いの潮ににこやかな笑顔から授業を真面目に受ける生徒の顔へと戻る。
　それからである。
　朝、登校してきたとき、授業中、休み時間、下校の時間。
　彼らは目だけで会話した。
（おはよう）
（ああ、おはよう）
　それだけのたった短い挨拶。めくばせ。いや、めくばせとも言えない。そんな一瞬の視線の交差。それだけの触れ合い。
　もしも二人の間に視線が質量となって現れたら、それは山間部に奔る送電線の様なものに違いない。
　それほどに強固な絆が誰の目にも触れずにそこに在った。
　運命の赤い糸という物が本当にあるのならば、まさにこれがそうなのかもしれない。
　お互いに一言の会話も行わずに、まだ相手の名前も確認しあってないのに、まだ相手の声すらまともに聞いたことがないのに、それでも二人はそう意識し、互いを認識した。
　他の誰にも気付かれる事なく、二人は意思を交わしていき、人知れずその心の距離を縮めていった。

　おい信じられるかい、君？
　まさかニュータイプや超能力者じゃないんだから、目を合わせるだけで意思が疎通出来るなんて話をさ。

　でも、話はそれだけじゃないんだ。

　ある週末に差し掛かった金曜日のこと。
　無口な彼は、無口であると同時にそれはそれはシャイだった。
　そんな彼がありったけの勇気を振り絞って、彼女をデートに誘ったんだ。

　どうやったかって？
　だいたいの見当は付いているんだろ？

　そうさ。
　彼は彼女に対して、意思を送ったんだ。

「明日、公園の噴水に2時、明日、公園の噴水に2時……」
　ってね。

　ありえないだろ？
　だけどもっとあり得ないのはその次の日だ。
　彼もありえないと、そう思って公園へと出向いていった。
　そしたら居たんだ。
　公園の小さな噴水の前に。
　まさか来るだなんて思っていなかった彼女がさ。
　彼も信じられなかった。
　だから彼女に聞いたんだ。
「なぜここに？」
「アナタが呼んだから……」
　それから二人は映画を観て、喫茶店でお茶をして帰った。
　二人の付き合いはこうして始まった。
　とんでもないきっかけで始まった二人は、ごく普通のデートを繰り返した。

　やがて。
　時は流れ、学校も卒業が近づいた頃。
　受験だのなんだので忙しくなった二人は、すっかり意思の疎通が出来なくなってしまっていた。
　そのまま二人の関係は自然消滅してしまったんだ。

　――そんな昔の出来事を、男は静かで寂しげなその目だけで、語ったのだった。

奥付

サイレント・ストーリー

http://p.booklog.jp/book/57019

著者：宇喜多広生
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/yuuki-kei/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/57019

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/57019

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ